村山リウ

ときがたり

源氏物語

読売新聞大阪婦人部編

137635

日文 701528694

村山リウ

ごがたり 氏物語

聞大阪婦人部編

読売新聞社

消印
B10627

葭城

村山リウ　ときがたり源氏物語

定価　一、二〇〇円

編　者——読売新聞大阪本社婦人部
編集人——守屋健郎
発行人——加藤祥二
発行所——読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二
印刷所——図書印刷株式会社
製本所——ナショナル製本
第一刷——昭和五十七年五月十四日
第五刷——昭和五十七年七月二十六日

0095—703270—8715
© 1982, Yomiuri Shimbun-sha.
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

村山リウ　ときがたり源氏物語　目次

口絵

『源氏物語』と私　――序にかえて　7
桐壺　うつくし・うるはし　13
帚木・空蟬　中流のひと、自覚した女　20
夕顔　頼らざるを得ない女　25
若紫・末摘花　女は作られる　33
紅葉賀・花宴　自由を願う女　41
葵　愛と恨み　47
賢木・花散里　もうひとりの私　54
須磨　孤独と寂寥と　61
明石・澪標　確かな目をもつ女　66
蓬生・関屋・絵合　自我に目覚めた女の孤独　76
松風　愛の葛藤を乗り越えて　84
薄雲・槿　ともし火の消え入るように　91
乙女　幼い恋　99
玉鬘　初瀬寺の因縁　105
初音・胡蝶・螢　人の世の真実　110
常夏・篝火・野分　映えあいの美　115
行幸・藤袴・真木柱　自分を創造する力　121

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

梅枝・藤裏葉　栄華の極み　130
若菜上　人間そのものを大切にする結婚　135
若菜下　分別のない女　142
柏木　泡の消え入るように　147
横笛・鈴虫　自己を持たない女　152
夕霧　女ほど、あわれなものはない　158
御法　露の消えるように　164
幻・雲隠　新しい時代の足音　173
匂宮・紅梅・竹河　近代的感覚を持った女　177
橋姫　熱い思いのかげに　182
椎本　秋と精神生活の調和　191
総角　物の枯れゆくように　195
早蕨・宿木　暗から明への転生　204
東屋　何となくむなしく……　210
浮舟　燃える熱情　217
蜻蛉・手習・夢浮橋　考える喜び、選びとる勇気　226
あとがき　233
源氏の君をめぐる系図　236
宇治十帖の系図　237
内裏平面図　238

装丁　カバー　森口邦彦
扉　石　葭城
岩黒永興

写真撮影　河野　節夫
岩崎　清一
山田恵三郎

村山リウ

ときがたり源氏物語

『源氏物語』を語る村山リウさん(大阪・千里文化サロンで，昭和56年7月)。

『源氏物語』と私　――序にかえて

私が『源氏物語』をこうしてお話しするようになろうなんて、まあ本当に思ってもみなかったことです。というのは、もともと私は文学には向いてない性格なんです。理科だの数学だのが好きで、それがむしろ得意で、鼻高だったほうでございますから。

大正八年に女学校を終えるとき、父親に呼ばれて、

「お前さん、学校はここだけじゃないんだよ。もう一つ上の学校もあるよ」

といわれた。あのころは、先生になりたい人以外は行かないのが普通だった。でも、桃割れに結って、お茶やお花を習いに行くのはいやだな、と思っていたから、

「それじゃ理科をさせて下さいな」

「そんなに好きなら、博士になれ。それなら応援してやる」

どうも、それには尻込みいたしましてね、

「どうしよう。家政科に行くわよ」

「何をいうのか。おばあさんだって、お母さんだって、家政をうまくやってきたぞ。学校へ行かなきゃ、できないようではダメじゃないか」

というわけなの。
「そんなら、日本女子大の国文科に行け」
という。私は無邪気なばかりで、とんちき、とんちき、駆け回っていただけでしょ、そんなのが、文学なんか、とてもとても。ところが、
「お前、できないから、学校へ行くんじゃないか」
というのです。仕方がないから、
「行きますわ」
といったわけです。
さて、入ってみましたらね、文学少女ばかり集まってきている。二十五、六人いましたけど、ちょいと小説を書き始めているとか、小理屈つけて和歌をひねくっているやら。ちょうど日本の文芸復興期でした。稲門、赤門、三田、白樺派がしのぎを削って創作し、仮とじ本のまま出版された。ロシア文学の熱い波も押し寄せていました。それを皆さん読むんです。私は筋を追うだけで、奥の意味がわからない。泣きましたよ、そりゃあ。針の山にいるみたいな思いで、一年、二年、過ごしました。
三年目に入って、いよいよ学校をやめようと思った。間違ったところに入って苦しい思いをするよりは、やめるほうが自分に正直だと思った。行李をくくりましてね、さて、その前に座ってみると、岡山に帰ったら、こういう友人はもういないと、涙が出て仕方がない。同じクラスの方が、
「あんた、どうしたの。何を泣いてるの」
「私、郷里に帰ろうと思うの。でも、あなた方と別れるのがつらくて」
「あんた、かわいいわね。みんな、わかってしゃべっていると思うの？　そう思うからせつないの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

よ。みんな、文芸評論を読んで、わがものみたいに語っているだけじゃないの」
「本当ですか」
——そのときに人生のずるさ、知恵を教えられたような気がするの。正直ばかりでは生きられないっていうこと。
「それなら私、ここにいるわ」
だから、私は目白をトコロ天のように出てきたのです。卒業した女学校でしばらく国語を教えていましたが、二十七歳で村山（故高氏＝医師）と結婚し、世話女房として、よくやりましたよ。
三十二か三のときでした。主人方のおばあさんが、
「目白を出たハイカラな嫁がきたそうだ。西国三十三か所を回りたいから、ついて行ってくれないか。きっと話もおもしろいだろうから」
とおっしゃるので、お供をすることになりました。ある日、奈良の長谷寺で階段を登ろうとすると、
「ちょっと待っておくれ。この辺に『源氏物語』に〝二もとの〟と詠んだ杉があったはずだよ」
「へえ？」
「おリウさん、国文科を出ていて、知らないのかい」
「どこにあります？」
「玉鬘の巻だよ」
「そんなの、ありますか」
「知らないのかい。まあ、そこにお座り」
と、石段に座って、三十分間お説教。

「おばあさまは、また、どうしてご存知なんですか」
と聞いたの。
「私は女学校も行ってないよ。だけど、息子にお嫁さんをもらってから、早く起きたら、いやがらせになるとも限らないから、向こうが起きるのを待つ間、おじいさんが残しておいた『湖月抄』（北村季吟著）を引っ張り出して読み始めたんだよ。初めから読んでわからなかったら、後ろに戻って、もう七、八回くらい読んだかしら、隅から隅まで」
その晩からです、私も『源氏物語』を読もうと思ったのは。だけど、おかみさんですからね、雑用が多くて、時間がまとまってあかないのよ。そういうとき、都合がいいのが『源氏物語』で、一コマ一コマが短いの。紙芝居のようにパタンパタンと場面が変わるから、ちょこちょこと読んで、またやめられる。コマ切れでやっている間に、いつのまにかまとまりができて。私って人間は、分析したり、総合するのが好きだから、何とかものになったのね。
戦争中、子供のない三十代の女房は、隣組の班長やら女子青年団の世話やら、どこやらの炊き出しやらで、重宝に使われた。でも、ときどき憂うつになると、読みました。豊かな気持ちになれるの。ああ、いいものだな、これを絶対に離すまいという気になったのに、戦災で何もかも焼いちゃった。
あるとき、村山に、
「本が一冊もない生活をしたことがなかったけれど、本がないって寂しいものね」
といったの。それから二、三日たって、村山が京都に行った帰り、
「ほら、おみやげ」
と小さな包みを渡してくれた。開けてみましたら、私が読んでいた『源氏物語』四冊の古本じゃな

いの。私、読んでるなんて、いうたわけじゃないですよ。だけど、長火鉢のそばなんかにあったのを、ちょこちょこ見ていたのでしょう。そのとき、人間的なこまやかさに感心したの、ほれ直したの。その心遣いがうれしいじゃないの。

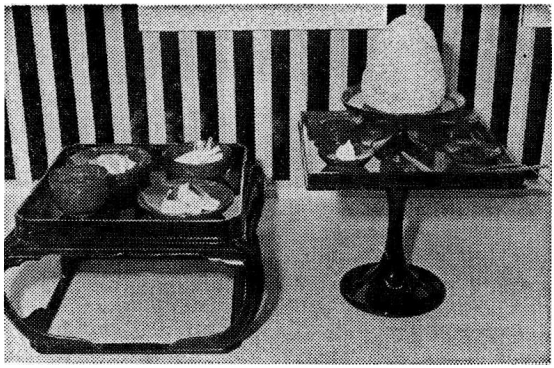
もう戦後も二、三年たっていました。その日から再び読み始めたのですが、このとき、おやっと見直したのね。それまで大恋愛物語という固定観念でしか見ていなかった。ところが、たとえば、夕霧が親友の未亡人である女二の宮に恋慕しているというわさを聞いて、源氏の君が紫の上にこういう。

「女の人は旦那さんが世話してあげないと、どうなるかわからない。あなたなんか美人だし、心配だね」

そのときの紫の上の感想、これがすばらしいのです。

「女ほど哀れな、かわいそうな存在はない。自分のことは自分の考えで行うのが人間なのに、女は人間として認めてもらえないから、自分の意志を行使することができない。表現の自由もない。いやならいやと、女二の宮ははっきりおっしゃったらいいのに」

こんな新しい考えが、九百五十年前の女性の頭の中にできていたのかと、びっくりしました。自分の意志を言葉にも行動にも表すことができないのなら、女が人間として生まれた価値はどこにあるのか、という疑問にずばっと入っているの。



平安貴族の食事の例。紫式部もこのような食事をとっていた。

私が戦後の感覚で読むからかしらと、初めから克明に読み返してみますと、あらゆるところに書いてあるのね。イエス、ノーをはっきりいわないのが、あの時代の美徳であったのですが、なるほど、そんなひとは女っぽく描かれてはいますが、みんな不幸せになっている。明石の上や玉鬘のように、むきつけてはいないけれど、あっとわかるようなかたちで、自分の意志を表現しているひとが幸せになっている。「私はこう思う」という〝思い〟を持たなければいけない、と繰り返し述べています。

そうか、こういうふうな読み方もできるのか、と発見したわけですね。私は現代語訳でしゃべっているわけではない。自分という人間を通して、私の感覚で見た『源氏物語』をおしゃべりしている。だからみなさんも、長い一生をかけて、原文をゆっくりお読みなさいな。暇がかかったっていいのよ。私だって、三十二、三歳からはじめて、五十歳過ぎまでかかったの。繰り返し読むたびに新鮮でございます。

うつくし・うるはし

桐壺

九百五十年も前に、これほど香り高い小説が書かれたのは世界で初めて。諸外国より五百年ほど早いわね。しかも、女性が書いたということに、われわれ日本人は誇りを持って読んでいい。

なぜ、女性が書いたのか、そこのところを考えてみたい。これは私の持論ですが、日本というのは、昔から女がしっかり働いた国だと思うのよ。農耕民族として、国のかたちがつくられてきた。農耕に一番ほしいのは太陽と水なんですよね。太陽の神（天照大神）も水の神（竜神）も女性。二つの女性の恩恵によって農耕は栄えていくものでございましょ。種をまき、育てることは、人間が子供を産み育てることと同じと考えられたから、生命を守る幸せを与えてくれる女のひとは大切にされました。

人間というのは、幸せになりたいのよ。し・あ・わ・せ——この四文字をみんな求めている。幸せを分析してみると、三つにしかならないの。第一に仲間がいること。人間はひとりでは生きていけない。第二に安定がほしいの。不安定で、明日もわからないのはいや。社会的にいえば、平和がほしい。そして、第三に変化。ただ変わっていくだけではだめで、変化の後ろに進歩があるかどうか。昔から人間が求めているのは、この三つ、簡単なものです。

この幸せを見つけるために、生産者として、社会人として、有能に働いてきた女性は尊重された。それが平安時代に入って、様子が変わったのね。ここに『源氏物語』を書かざるを得なかった理由があると思うの。上層階級の女は社会的な活動から締め出され、家の中に封じ込められた。そこで女がものを考える必要性が生まれてくる。

このころ、大勢現れた女房たちが、男の世界と女の世界の接点にいた。貴族たちは、娘を女御、更衣として宮中に入れ、権勢を手に入れようとして、娘の家庭教師に才能のある女房を集めたのね。そのうち、藤原道長が、たった十二歳になったばかりの娘・彰子を中宮に立てた。すでに皇后・定子は清少納言などを集めて、すばらしいサロンを作っていましたから、それに対抗するために迎えたのが、紫式部なのよ。学者の家に生まれた彼女は、気位が高くて、いつまでも結婚しなかった。二十歳のころ、越前守になった父・為時について彼地に行ったものの、わびしい暮らしに耐えられなくなって、熱烈な手紙を漢文で寄こしていた。親子ほど年の違う宣孝と結婚するため、単身京都に戻ってきた。その宣孝が足かけ二年で亡くなって、娘ひとり抱えた未亡人になっていたのです。

この紫式部って、無口でおとなしくて、漢字を知らないふりをして、じわっ、と相手を観察して、胸の内にためておいて小説に書く。こんな人を友だちにしたら気を遣うわよ。そりゃあ、清少納言の方がさばさばして気持ちがいい。でも、そんなさめた目があったからこそ、権力や男の身勝手に操られる女の生き方を厳しく見つめ、宮廷生活の明暗を描くことができたのね。

こうして書かれた『源氏物語』五十四帖。登場人物三百六十人。ときに小さく、ときに高らかな響きを奏でながら、大交響曲を構成しています。この序曲がまた特徴があるの。書き出しはこうです。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com